



三省錄

一

9
4077
1

三省錄



口 9
號 4077
卷 1



理齋志賀翁著
德齋原義補訂

三省錄

五卷

天保十四癸卯
正月官許新鐫

潤身堂藏板

元會田主



三省錄序



古之聖人。素衣服。教飲食。攝事室者。非惟人身之安息之計也。蓋所以使其知貴賤等給之度也。然則衣食住三者。生於禮義。不可一日而闕者矣。書云。欲敗度。罔敗禮。而志於道者。名守其分。為檢以脩其身。



三月十四日
元會田主

則可以免踰等僭上之戾也。且夫為
人之情。少得安息。執福禍者。既
福禍。或至破產以滅身。之。不悅
歎哉。余親生考。理齋翁。嘗輯三
省部。將以為世俗之針砭。而有言
涉觸諱者。故此書不行而沒。是為
遺憾。今茲壬寅。官起維新之

改。以福禍者之繫。弛徽。歷之。念。以。開
之。議。之。路。是。乃。不。為。天。下。之。一。大。快
事。於。是。以。書。六。遂。曰。公。許。壽。法
擇。以。行。之。使。世。人。由。焉。以。至。聖。賢。守
分。之。要。為。庶。幾。乘。助。風。教。之。一
鳴。呼。使。先。考。遇。新。善。世。則。又。必。有
而。建。議。者。今。則。已。矣。刺。成。之。一。石。

一也。不能自禁。因叙其言。以實其首云。

天保十三年壬寅臘月上澣

江都德齊原義正道甫謹後



澗九鶴書



三省錄序

甚矣世之日趨侈靡也。韃橐以來昇平二百年。人民逸豫。衣非綾羅。不服食非珍羞。不飽居競華麗。器翫奇巧。噫。土階三尺。遂變為瑤臺百丈。可不慨嘆我。我神祖之龍興也。身在于戈之際。備嘗艱苦。及其海內蕩平也。儉以率民。矯豐臣氏之奢極。而救國家之靡敝。予民休息。所以有今日鼓腹之樂也。夫國奢則示之以儉。方此之時。上不尚儉節用。則國靡敝而民疲極矣。志賀子堪有慨于斯。乃輯錄吾邦明君賢相言行。涉于儉者數百條。題曰三省錄。省減衣食住三者。不使趨奢也。

○元龜のころは言祿の武士の妻女も家々の子やあるはななく
嫁入のころは麻のうらぎで忌々眞木とつゝやの子尻くけて
うらぎぬ不貞を犯す行ぐるよし
古老説

○井伊直孝一生柿漆の布袴中はこれ色漆名布此下等なるれ
しとより四月日光直孝校日親授その外大勢法裁あり
朝法書合のころは當年の例よりそやく暑向ふ故より肥後
く蚊よとて控ねとねゆを何り日親伝きしは家おの故様何り
しとてえと物手をつくる釘を尋ねぬが後の様よとて自由
が浦しとていさぬがよりのぞ校箱と枕の上おを宛帷子と
かぶとゆいしとてゆむその透るより故入くかくの如くは陰に
まじりしとて伝きまじり
寧固齋談業

○天明辛丑の冬亀井魯が肥後やのぐりとりし細川侯の政事
とあるよし久し居諸世と遊歴し士風民情と心付くるとり
幾度も肥後の風俗に感入り家中の事其勤職も出精
し遊情なる風俗かしも見えぬ勤る人々も学校替古つとめ
聊々懦弱なるものありて侍小路町方とて何れ思ふは琴三味線
もこれ音聞え及川稻あなどある士とて一度も見及右二事一向
無きよあるはしとて居一度も見聞をうりしとていさしはせり
と存らるるは彼世とて交りしは多くは儒者なりしが其学も出動と
見ゆるは袴も羽織もこれ本様なり大城古十段とのよき元来
町人とも富饒なる酒屋なりしを学文も詩文も達者なり
し由急儒者も居りしとて何れなり居りしは以て思ふるは於學

とめやあ極の小土器は味噌のサシ付らるて取わらむや
是りぬとて酒とてかきこむるはやつぎく果はかきこむり
時頼日本六十余州の兵の権をふる人おどろけり
今封條の代はせきこむる士君子のしむやをねむるは
あやむいぬとてせきこむる代とてせきこむるは人いぬ
うらむとてせきこむるは

理齋日閑田耕華小或々の晴きのよりけりて白小袖と因縁の
つらゆり小倉り給ふ一き使小倉中よりきこむる文の
一とせり内、掛於二と有とあん専あの人雑語は何
葉殿野の會とて古ひる春、小豆餅のころりたるを
盛りておされる中なりされた故に上をこし記さる負富野人

實素のり時風とて下とて何ゆも素場長生より太雷代の
なつひくをさし白川度法執政の物より海邊つる影とてや
小舟のりし將一とて厚余のりし林とておまはれぬとて
しき鎌倉右大臣実朝のやのふれぬとてけりし小舟の上は
何うけたりとて奈奈原の志の原とててて本野とて海邊つる
さるる屋とててて鎌倉御代何とて何とて何とて何とて

○御家人の内托樂と好とて色と腕とて持ぬ身と持器とては
もねゆとて色とねゆともねゆり身とて色とねゆともねゆり
木橋手小舟城はせ候をお考に雲舟一とて風信舟と美籠と
尾成はねと歩危はさし華籠の風北やの大うと二三手石以下
大舟のより記さるるまを小舟のりし習とて及びぬる

まゝしたつひに中合はる時にお場とさうせん中以後
米價中壱子米價はれりとの價は自由下下の中
や幸存に米價と物價中とさうせん中以後
二種ははあはれりや幸存に米價はれりとの價は自由下下の中
運送の入用をうけか後より時にお場とおまらさうせん中
自由はその價と上ヶ下ヶ不仕は米價中とさうせん中以後
御論義とさうせん中以後

○近年米澤侯と節侯の政と出娘はと他は自分衣を
志朝朝夕と膳初も一汁一菜はさうせん中以後
中一同子御衣と忌一お勤と後信りさうせん中以後

一同子御衣と忌一お勤と後信りさうせん中以後
衣と忌一お勤と後信りさうせん中以後
毒と思石にお勤と後信りさうせん中以後
不仕は及理極るさうせん中以後
その君の思石と一國の上で昔世話とさうせん中以後
一才の上一切の安樂とさうせん中以後
先銘と衣服と使一仕度答はさうせん中以後
後信り人君の法徳はさうせん中以後
人法事おとさうせん中以後
と後福一盤と使とさうせん中以後
信りらさうせん中以後

あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと

落穂集

○必兼の終末に於て二百俵を以て取立し小舟の底の松子と

あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと
あつたまのふらふらと依つて侍のきぬめと女のおやめと

ぐしをいふは式子石をくちくちと削る身は、
手ははし、徒士のそのたの鬼の子の指をうて大防つきさ
海りする利後さよのまじりや、武士を終小切兼、
かくつとて立止た屋は、言本履長柄のうらうら
かけさ防板も能ある仕り、うらうら人、
賢者が知まるといふけ、
○さうして衣類をくちくちと削る、
よりおのり、
よら、
か、
てお、

○今の函箱小枝箱との蓋あり、
ゆ板二片と合せ、
そ、
日本信筒子、
簿の列、
教と、
形者の、
十九

○むくしの女の帯の幅三寸、ゆるゆるの縁さ、式寸ほどと云
又す、ゆるゆるの七尺五寸と云
一代女。むくしのこと。むくしゆるゆるの縁。

○唐の治とす、小堯舜禹王湯王文王武王成王康王など、
天道をたそき、衣食をかざり、家居を藤相ひ、
天下の業民を安穩に治せ、るゝた、四百年六百年、或を
八百年、天下に礼せ、は子孫榮へ、るゝ、後周の世の末あり、
君へ、人畜を極せ、さし、も智慧あり、た、世を科、す、天道の理
と、喝へ、るゝ、仁義の道を志し、た、衣食を金銀と、す、
居、ま、せ、るゝ、民の苦、し、を志し、た、
そ、るゝ、人、の、樂、を
な、せ、るゝ、の、一、代、二、代、を、不、後、ひ、るゝ、
本作録

○諸侯の封地三十余万石、及び、るゝ、ふ、その、や、女、志、は、るゝ、小、袖

た、つ、の、い、ゆる、ゆる、や、古、び、るゝ、侍、女、園、門、の、り、と、つ、るゝ
士、告、るゝ、父、君、に、祈、つ、祈、るゝ、世、洞、ざ、ん、と、は、後、教、るゝ、侍、女、
侍、女、の、こ、も、侍、が、や、ま、ぬ、あ、るゝ、づ、と、るゝ、づ、ひ、間、で、は、るゝ、世、
か、科、を、後、せん、あ、も、士、某、が、け、り、と、言、るゝ、か、つ、つ、何、ま、い、るゝ
と、るゝ、づ、は、答、ぬ、るゝ、何、も、云、あ、るゝ、い、ま、あ、り、ど、や、と、るゝ、色、い、と、
何、と、ね、を、き、るゝ、づ、か、き、科、るゝ、け、り、と、や、は、るゝ、ふ、よ、り、に、院、
状、を、な、り、るゝ、と、あ、く、と、を、志、を、な、ら、ぬ、と、るゝ、と、さ、い、何、の、時、に、世、の、
上、と、夫、女、は、るゝ、るゝ、人、で、院、園、に、を、晴、な、き、に、同、列、の、士、某、が、扱、で、
傍、り、るゝ、と、るゝ、あ、るゝ、と、るゝ、その、ま、白、業、に、書、と、あ、るゝ、と、るゝ、
傍、り、るゝ、と、るゝ、と、るゝ、と、るゝ、と、るゝ、と、るゝ、と、るゝ、と、るゝ、
間田耕筆

○夜着のり慶長元和のころ、と、あ、るゝ、と、す、と、云、む、り、るゝ、小、麻、呂
二十一

とて常々此衣被の事も一々大なるで下おまたるそのころ
ふらんせかけの上の方もこそおむかへしつらと連珠四季
冬の好子ふらんせのころおむかへしつらと連珠四季
をそや有つても古法でやうく身置丸人もおむかへ
の季おむかへし 近代世事談

○ふらんせの着るものことつらと連珠四季の
ふらんせの着るものことつらと連珠四季の
本物のつらと連珠四季の着るものことつらと連珠四季
の種もつらと連珠四季の着るものことつらと連珠四季
同じ蒲の種で着るものことつらと連珠四季の着るものこと
美人を蚕糸で着るものことつらと連珠四季の着るものこと

古たふらまなや 懐かし 同上

○御ねもののみむり 今のころ四季折々の衣被なるもの
しつらと連珠四季の着るものことつらと連珠四季の着るものこと

今つらと連珠四季の着るものこと 同上

○太平記云青砥なるものおむかへしつらと連珠四季の着るものこと
たるおむかへしつらと連珠四季の着るものことつらと連珠四季の着るものこと
おむかへしつらと連珠四季の着るものことつらと連珠四季の着るものこと
むくろの好子ふらんせのころおむかへしつらと連珠四季の着るものこと

おむかへしつらと連珠四季の着るものことつらと連珠四季の着るものこと
の仕おむかへしつらと連珠四季の着るものことつらと連珠四季の着るものこと

ころもはねらるる用ひらう麻のくはたきものわの緒朝の
きく麻揃とみ付しそのちもをうらう本孫のま
揃よりまうつたか揃を本孫換へしよる本孫に二子を
イフとまを訓を付らる今小神あ一幣帛とら麻揃は
くまららるる所を揃へ故実くら成らる

○まう日神代から揃をぬきとみ付し神はたてしりその後
穿と製しとみ付しとらぬきと古くは旅行する人
をぬき袋としてふくろをたらし中は赤色のくまをたらし
米麦の類を交へしと持り玉の場あまひい山川なご
道神神をたらしとらぬきと旅行の所あをたらし
からし今請ふは石氏とつらと繩のたらしとらむし此道

祖神まうづし夏家の神縁かけ度いぬきとらむし
とあらうとらむしけぬとぬらう上古死するものあらむ
旅立の作あなしと棺あしと今死者のまらあ
袋ら路陀袋とらむしとらむしとらむしとらむし
天空の輝とみ付しとらむしとらむしとらむし
とらむしとらむしとらむしとらむしとらむし

○まう日神のまう 堂上の上欄の上袴下袴二つ着るま
その下袴の紐は寝る時と寝る時とこの紐をくはる意の
袴や寝るまう井手の下袴なうしとらむしとらむし
毎くし井手の下袴はたきとらむしとらむしとらむし
まう御布でめて男のぶととらむしとらむしとらむし

さきさきこれのきた根なる者と暇しき天中を礼さんと
しるやとてそのおのり持てを扱ふるも

○古た文おむりも奢らるび〜禁さるき〜

真任宗任係殺てた〜

の位人日軍の九部〜

罪なり根義と〜

海くぬ〜

味〜の陣と〜

後月の事〜

と〜の料〜

と〜か〜

のふ〜と〜たり
奇麗小た〜
扶持も〜
と佑あら〜

○大河内金去郎中伊豆守〜

さ〜く〜人の〜

〜中〜

〜中〜

〜の〜

〜し〜

〜し〜



三省録上終



○松平伊豆守信綱曰くお仕はしつた裏付の上下はあやなす一宅か
舟もしたもきやきもきもたふやうに人のあつら
彼よりうまむものお仕はしつた裏付をなすはあやなす
あやなすはあやなすはあやなすはあやなすはあやなす
家おはしつたあやなすはあやなすはあやなすはあやなす
と云ふ事——同上

